



Title	文学・歴史を通じたコミュニケーション
Author(s)	合山, 林太郎
Citation	Communication-Design 特別号. 2016, 1, p. 68-77
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55665
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

文学・歴史を通じたコミュニケーション

合山 林太郎

— KEYWORDS

典籍

書誌

国語

多言語

— AUTHOR

合山 林太郎 | Rintaro Goyama

コミュニケーションデザイン部門 准教授

専門は日本文学（幕末・明治期を中心とする日本漢詩文）。国立国会図書館勤務を経て、2009年4月より大阪大学大学院文学研究科講師。2013年よりコミュニケーションデザイン・センター講師、現在、准教授。CSCDでは、モノと文化、図書館、国語教科書などをキーワードとしながら、文学を通じて人と人とのつながりを考えることをテーマとして、研究・教育に従事している。

はじめに

コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）の教員となり、2年半が経過しようとしている。この間、筆者は、個人の授業科目として、「文化資源学入門」と「文学と社会」という二つの授業を開講し、リレー講義の「メディア技法と表現リテラシー」及び「コミュニケーションのいろは」において、「小説をリメイクする」という講義を担当した。いずれの授業も文学作品や歴史資料について、実践や体験を通じて、新しい角度から捉え直してもらう、ということ趣旨としている。以下、その概要とそこから得た感想について述べてゆく。

1

小説をリメイクする

「メディア技法と表現リテラシー」は、オムニバス形式の授業をとおしてコミュニケーションについて考えるというものである。私の回は、「小説をリメイクする（実際には改作する、というニュアンスである）」という内容とした。

これは、森鷗外『舞姫』、葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』など、教科書などでも取り上げられる短い小説を、単に味読するだけではなく、より共感できるかたちへとリメイクしてもらう。リメイクのやり方は自由であり、時代や舞台となる場所、登場人物の年齢や職業などを改変するものから、自身の好みに合わせて物語の全体的な色調を変更するものなど様々である。数名のグループに分かれ、感想を話し合いながら自由にアイデアを出してもらい、各グループ一つずつ最終案を発表して終了となる。その際、講師は、文学研究における知見を必要に応じて紹介し、また、アイデアが出やすいように議論を導いてゆく。『舞姫』で言えば、エリスがドイツ人以外の外国人であった場合、物語はどのように変わるか、などといった問いかけを行う。

この授業の意図は、文学作品という、ある意味、最も動かしがたく感じられるテキストを、あえて改変することで、物語も変えられるものであるということに自覚してもらう点にある。たとえば、日常会話からメディアによる発信まで、様々なレベルで物語は作られ、我々は日々それを享受しているが、これらは絶対的なものではなく、私たち自身が主体的にかかわることによって変更が可能である。こうした問題について、この授

業を通じて意識してもらいたいと考えている。

また、小説の精緻な読解という点からも、作品の諸要素を別のものに置き換えることは意味があるように思われる。こうすることによって、その作品を成立させているものが何なのかをよりよく意識することになるからである。実際に受講者からの意見には、文学論文などにおいて見受けられる深いレベルの“読み”と重なるものも少なくなかった。

授業への感想としては、「名作を変更することに抵抗を覚える」といった声もあったが、「楽しく議論できた」といった肯定的なものが多かった。自由に話し合うことができる点が、この授業の成立のための鍵だと感じている。

2

文化資源学入門1 ― 書誌学を“体験”する ―

「文化資源学入門」は、歴史資料などの文化資源の評価・保存・整理・活用について、総合的に学習し、文化資源について、自分なりのイメージを持つことができるようになることを目的としている。

授業の内容を見ていこう。この授業では、まず、歴史資料の取り扱いについて、江戸時代に作られた日本の伝統的な様式に則って作られた書籍（和本）を対象として学習する。くずし字読解についても訓練を行う。これらは知識として習得できればそれに越したことはない。ただ、歴史資料をめぐることは研究の蓄積があり、それ無しでは考えることができないことを理解してもらえたならば、それで十分であるとも考えている。

次に、本授業では、「四天王寺・春の大古本祭り」「京都・春の古書大即売会」など、古書展に参加し、実際に古書を購入してもらう（値段は高くても1冊1000円程度）。多種多様な本が雑多に陳列されるなかで、どの本をどのような理由で選ぶのか、小さな金額であっても、身銭を切って何かを選ぶということは強い印象を本人に残す。その感覚を基礎として、歴史資料に対する理解を育んでゆこうとする試みである。

さらに、歴史資料に関連する職業に就いている方を招き、経験などを講義していただいている。大阪大学適塾記念センターの廣川和花氏には、適塾とその関係資料の保存の背景に、様々な社会的な営みがあることを、また、大阪大学総合学術博物館の松永和浩氏からは、博物館における企画展示における工夫などについて、具体的な事例を挙げながら解説いただいた。

このほか、時事トピックなどを挙げつつ、ディスカッションを行った。文化資源をめぐる評価軸は多様である。たとえば、アンティークや古書などの市場では、値段というかたちで価値の優劣を決定している。一方、アーカイブに関わる方の多くは、すべて

の歴史資料は、その時代の事実を伝えるものとして、等しく価値を持っているので、可能なかぎり多くのものを、原態をとどめたまま、後世へ伝えるべきであると考えている。授業では、こうした様々な観点を整理するとともに、自身の立場を意識する機会を設けた。

3

文化資源学入門2 ― 図書館の現場を知る ―

歴史資料と似ているが、その性格がやや異なるものに学術資源がある。「文化資源学入門」では、図書館を舞台にこうした学術資源を取り扱うことの意義についても考察した。

本が好きであることと図書館で働くこととは結びつけて考えられやすい。ただ、今日の図書館は、数百万点レベルの膨大な学術資源の管理や電子資源への対応を仕事の内容としており、その業務の内容は、かつての図書館司書が持っていたような優雅なイメージとは異なるものとなってきている。

「文化資源学入門」では、こうした今日の図書館の現実を、現場で働く司書の方からお話いただき、その後、ディスカッションなどを行い、理解を深めた。具体的には、佐藤久美子氏、堀田祐子氏、日高正太郎氏、三木保孝氏、末田真樹子氏、赤松威倫氏、久世さとみ氏ら、大阪大学附属図書館・総合図書館の方々、また、兼松芳之氏、奥田倫子氏、上田志保氏、小林廉直氏、武田和也氏ら、国立国会図書館関西館の方々の協力を得て、意見聴取や講義、説明をしていただいた。その内容は、目録業務のあり方、図書館の本質・未来像、コモンズなどの図書館の新サービス、増大する電子資源への対応方法、デジタル・アーカイブにおける日欧の考え方の違いなど、多岐に及んだ。

講義や討議の場においては、意見交換がスムーズになるよう、毎回、工夫をした。図書館員の方から、図書館サービスについていくつかの問題（「ユーザーのニーズに応じた選書を実現するためには、どのような方法があるか？」「理想の図書配架（本の並べ方）とは？」）を示してもらい、それに対して受講者が提案を行う、というかたちをとったこともある。

また、受講者の図書館への関心が、多くの場合、図書館で働きたいという現実的な欲求と重なっていることから、明瞭にキャリアの問題として議論の場を設定した場合もある。「社学連携セミナー ライブラリアンになりたい人あつまれ！―21世紀の図書館とは―」（2015年7月15日、大阪大学附属図書館〈総合図書館〉）という公開のワークショップ (a) がそれに当たる。

4

文学と社会

「文学と社会」は、「理想の国語教科書をつくる」という問題設定のもと、文学作品（詩や物語）と社会との関わりを考えてゆこうというものである。参加者は、国語という授業の持つ意味やテキストを読む行為の意義について討論を重ね、その結果を踏まえ、理想の国語の教材や作品へのアプローチをそれぞれ提案することが求められる。議論の成果をまとめて、新しい国語教科書及びその教案を作り、それが授業のゴールとなる。

この授業の目的は、国語教育手法に関する具体的な検討ではない。現代社会において、私たちが、最も頻繁に文学作品と接触するであろう“国語”という場を熟考することによって、文学と社会の関係について見直すことを主眼としている。具体的には、ある作品が教科書に載るとはどういうことなのか、そもそも作品を読解するとはどのような行為なのかを考えた。

このような問題を考える際に重要となるのは、現今の日本の国語教育を、比較などの行為を通じて相対化することである。そのため、授業では、世界各国の言葉に関する教育や、戦前の日本の国語・修身教育に関する調査を実施し、今日の日本における国語教育との比較検討を行った。



【写真】2014年度「文学と社会」の様子。
アルゼンチン、イタリア、ブラジルからゲストを招いた。

とくに海外の国語教育については、モハammad・モインウッディン（Mohammad Moinuddin）氏、アメリカのサイモン・パク（Simon Park）氏、ティモシー・ジェイコブ（Timothy Jacob）氏、ドイツのテレザ・シュベヒト（Theresa Specht）氏、イタリアのコマストリ・キアラ（Chiara Comastri）氏、アルゼンチンのファクンド・ガラシーノ（Facundo Garasino）氏、ブラジルのナカエマ・オリビア ユミ（Olivia Yumi Nakaema）氏、イランのアブラル・バスイル（Abrar Basir）氏ら、7ヶ国のゲストを招いてレクチャーをしていただき、多くの知見を得ることができた。

たとえば、多言語社会であるインドから来たモインウッディン氏からは、「日本という国があるために日本語は必要（必須）ですか？」という問いかけがなされた。多言語で構成される国と比較した場合、日本の“言葉”がナショナル・アイデンティティーの中核の一部を占めている状況は、やや特殊に見えるという。また、アメリカでは、独立戦争などの歴史、荒野（荒野開拓）のイメージが取り込まれた、積極的価値観を表す教材が相当数あり、こうした教科書を読んできたサイモン氏の見ると、日本の低年齢層の国語教科書は、死を取り扱った悲しい話が多いように思われるとのことである。イタリアのコマストリ氏は、自国の教育が、文法などの精密な言語修得に力点を置いていることを紹介し、ともすれば自由、創造性といった言葉に流れがちな私たちの議論に大きな示唆を与えてくれたし、ガラシーノ氏の、アルゼンチンでは「文学」という教科が設けられており、政治色の強い作品なども教員の裁量で自由に授業に取り入れてよいという話は、私たちが国語という枠組みを考え直すのに役立った。

このほか、この授業では自己啓発書、説得術や詭弁に関する本、さらにはコントや漫才のロジックやパターンを分析するなどして、これまで用いられなかった素材を、国語教育に取り入れる可能性についても検討した。

年ごとに授業のたどる道筋は違っており、2013年度は、言葉の教育をコミュニケーションの教育と捉える方向で検討が進み、最終成果物も映像や歌謡曲の歌詞などを教材として取り上げるなど、新しさが目立つものとなった。2014年度は、国語教科書よりも言語教育における考え方そのものに日本と海外では違いがあるという認識のもと、言語の修得と物語の創造の2ブロックに分け、教材の運用方法や評価のあり方まで含めてトータルにデザインするというものになった。

5

学際の魅力

以上のような授業を行うことで、筆者は多くの知見を得たが、そのなかでとくに印象に残ったのは、多様な学問的・文化的背景を持つ人々が集まって議論することの魅力である。

いくつか印象に残ったシーンを挙げよう。たとえば、『セメント樽の中の手紙』の読解においては、ある学生が「冒頭、鼻のことばかり書かれているけれど、分かりにくいです」と発言したのに対し、社会人経験者の受講者が「いや、これはとてもリアリティーのある表現です。自分も内装の仕事をしていたんですけど、気になるのはまさに鼻なんです。粉塵が入って、ほじりたくなるんです」と応じ、蒙を啓かれたこともあった。

また、「文化資源学入門」において、大阪府立中之島図書館の廃止問題（橋下徹前大阪市長が発言した、図書館をやめて美術館などに転用し、中之島地区全体を活性化しようという構想）（『読売新聞』2012年2月23日・大阪夕刊（1面）「中之島図書館を美術館に 橋下市長ら構想 蔵書50万冊、他施設へ」、ヨミダス歴史館、2015年12月25日最終確認）を取り上げた際には、「美術館の方が図書館より資料保存のために必要とされる建物の条件は厳しいはずなので、中之島図書館の建物では難しいのではないか」という意見が工学部の学生から即座に出た。

なお、「文化資源学入門」に関して言うならば、文学部以外にも工学や薬学の学生を含むが、みな様に、受講動機として、「くずし字を読むことができるようになりたかったから」と述べていた。こうした専門領域を超えた知識的ニーズについて対応する必要があるだろう。

6

ゲストの重要性

授業を通じて、ゲストを招くことの重要性にも気づかされた。専門領域における具体的な問題について、経験や感覚とともに話をしてもらうことができ、知識以上のものを受講者は得ることができる。

廣川和花氏が講義中にされた、適塾の展示と資料保存の両立に関する話は、そのよい例と言える。適塾は、北浜に残る建物自体が、重要文化財の指定を受けている貴重な歴

史的建造物である。ただ、以前は、その建物のなかで緒方洪庵とその門人たちが残した典籍や文書が保管され、また、展示されていた。

通常、歴史資料の保管や展示には、温度や湿度が適切に保たれ、紫外線などを遮断した空間が必要となる。しかし、適塾はこの条件をクリアできているか、心許ない状況であった。幕末に建てられた適塾は、建物の構造上、外気や日光の遮断が難しく、かといって、その建物に重文指定がかかっているため、資料保存のための改築を行えなかったからである。

このようななか、適塾記念センターでは検討を重ね、阪大の敷地内に収蔵庫を建設し、歴史資料をそのなかで一括して保存すると同時に、北浜にある適塾の建物内での展示資料はすべてレプリカに置き換えるという措置を取った。資料保護を最優先しつつ、適塾の訪問者も一定の満足が得られるよう、総合的な見地から、運営の方針を定めたのであった。

こうした特殊な環境を管理し、そのなかで企画などを行う感覚を、廣川氏は、「博物館として作られた建物で展示を考えるのは、白いキャンバスに絵を書くようなもの。しかし、適塾の場合は、キャンバス自体にたくさんの制約がある感じで、大変です」という印象的な言葉で説明された。こうした実感のこもった表現に、受講者はとくに敏感に反応していたように思う。

7

国際化、国際性への対応

「文学と社会」では、外国の方に話をしてもらう機会を作り、受講者が国際的な視野を持つことができるよう工夫し、一定の成果を得たと思う。ただ同時に、授業を「国際化」する具体的な方法については、なお考えるべき問題が多いと感じた。

たとえば、「文学と社会」では、2回にわたり、外国人のゲストに英語によってレクチャー、ディスカッションをしてもらった(日本語が理解できない方に登壇いただいた)。

語学に関心のある学生など、こうした機会に目を輝かせる者も多数存在する。また、英語は不得手だと言っていた学生が、たどたどしくはあっても、一生懸命に自分の考えを、ゲストに説明する様子は、CSCD で見た光景のなかで最も感動的なものの一つでもあった。しかし、この英語の授業から、急激にモチベーションを低下させた学生がいたことも事実である。特殊な要素を取り入れる場合は、それへの対応できない人々への配慮が必要と感じた。

授業には、どのコースにも数名の留学生がいることが多く、この点についても対応の必要があることを痛感させられた。たとえば、「文化資源学入門」を受講したヨーロッ

パ出身の学生は、くずし字を読解する部分など、日本語についての深い知識が前提となる部分はかなり難しいという感想を訴えた。「小説をリメイクする」においても同様の問題があり、日本人にとっては馴染み深くよく知られている作品でも、留学生にとっては必ずしもそうではない場合がある。また、掌編小説であっても、日本語を母語としない人にとっては、短時間での読解は難しい。文化的背景や言語能力の違う人が、必要なテーマについての知識を共有し議論するためのプラットフォームをつくることが急務であると感じた。

なお、日本語の小説については、10 程度の言語への翻訳を収録する多言語翻訳を、筆者を含むチームで作成しており（日本文学多言語翻訳プロジェクト）^(b)、本授業においても活用した。

おわりに

以上のように、CSCD において様々な経験をしたが、筆者自身の感想を要約するならば、授業を、“社会”に開いてゆくこと、授業の中に“体験”を取り入れることの重要性に気付かされたということになる。こうした知見を、今後は自身の専門教育を含め、様々な教育機会のなかに還元してゆきたい。

なお、本稿における職責の表記は、ご講義いただいた当時のものである。

リンク先

*a) 大阪大学総合図書館公開ワークショップ「社会学連携セミナー ライブラリアンになりたい人あつまれ！

—21 世紀の図書館とは—」：<http://www.hs.ura.osaka-u.ac.jp/goyamarintaro/archives/334>

*b) 日本文学多言語翻訳プロジェクト：<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/web/MLTP/index.html>

